結草
kusamusubi
No.30

Publishing house:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2020.07.01

世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ

道因寺住職　相馬　豊

今ほどご紹介いただきました、白山市道因寺の住職をしております相馬豊と申します。よろしくお願いいたします。

月日が流れるのが本当に早くて、昨年の報恩講から今年の報恩講まで一年というのがあっという間に過ぎていきました。その間、それぞれの方も色んな出来事に出会って、今日この場に身を運んでおられるのではないかなと思います。

今年（平成三〇年）は六月、七月、八月、九月、そして今月と本当に自然災害が数多く起こり、同じ時代を生きている人々が、自然災害というかたちでその尊いお命を失っていかれた。失った家族の方々にしてみれば、どこにその声をぶつけていいのか分からず、またどうすればいいのかも分からない。現在もそのことを背負いながら生きておられる方もいらっしゃる。私達一人一人が、今ここに人間という身をいただいて、生まれ、生きている。その生きるということがどういうことなんだろうかなと、そういうことをですね、六月から十月のそういう出来事を通しながら改めて自分自身も考えさせられていることであります。

世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ

親鸞聖人（しんらんしょうにん）が関東のご門徒さんとやり取りをされたお手紙の中に、親鸞聖人のこんなお言葉が語られています。

世のなか安穏（あんのん）なれ、
仏法ひろまれ

『親鸞聖人御消息』

親鸞聖人のお言葉として今日まで伝えられております。「世のなか安穏なれ」、どの時代を生きているとしても私達一人一人が、尊い人間という身として生まれてきた。そして今も生き続けている。地域は違っても、同じ国籍を得ている。世界に広げていけば、民族は違っても、それぞれ一人一人が人間として、今も生き続けている。その世の中において、誰もが安心して穏やかにその生涯を終えていく、このことがこの親鸞聖人のお言葉の中にも含まれる。そして「仏法ひろまれ」と。お念仏の教えをいただき、そしてお念仏の教えを聞きながら生きる喜びを念仏に見い出してくださいと、これが親鸞聖人が私達に語りかけられている大きな言葉でないかなと思います。

これは誰もが本当に願い続けていることでもあるかなと思うんですね。しかし、言葉ではこういう風に願われていても、私達が身を置く世の中というのは、先程も申しました様に、様々な出来事が私達の身に起こって来ています。そういう現実を通し、そのお命を終えられていかれた方々を報道で知ると、やはり悲しくなったり辛くなったりします。しかし一方で、私達の中にはもう一つの心があります。悲しむ心と同時に、私や私の家族でなくてよかったなと。こういう心は私の中にもあります。

浅田正作さんの言葉

こういうことを語られた方がお

られます。浅田正作（あさだしょうさく）さんという方がですね、こういうお言葉を綴って下さいました。

台風の進路が変わってくれればいい。こんな者が祈る世の中の安穏とは何か

この言葉に触れた時、痛い所を突かれたと思いました。親鸞聖人は「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」と、こういうお言葉を私達に語りかけられて、念仏を申す生活をし、そして念仏の中に生きる喜びを見出してくださいと言われ続けた。しかし、その声を聞きながら私の現実の生活は何かといえば、この台風２０号、２１号、あるいは２４号、２５号と日本列島を台風が横断していきました。あの予想図を見た時にですね、石川県を外れてくれないかな、太平洋側に沿って日本列島から離れた所に行ってはくれないだろうかな。あるいは風や雨の影響が無ければいいのにな、そういうことをやっぱり思います。

私自身も実は台風２４号の時にまさにその影響を受けてしまいました。九月二九日、三〇日と広島にある真宗大谷派のお寺さんの報恩講にご縁をいただいて広島に行っておりました。二九日は雨は降っておりましたけれど、台風の影響は無く、無事に広島に着き、そして報恩講の法話も無事に終えることができました。

しかし、三〇日です。日中のご法話を終えてお斎をいただいていたところ、そのお寺さんの坊守さんが横へ来られまして、「相馬さん、今、台風がだんだん日本列島に近づいて来ているんですけど、今日の予定はどういう風になっていますか？」と聞かれたので、「午後からのご法話が終わってから、広島発１８時３５分の山陽新幹線で新大阪まで行き、新大阪からサンダーバードに乗って自宅に帰るという予定で、もう切符も用意してあります」とこう告げましたら、坊守さんがこう一言、「山陽新幹線、北陸本線、全て運休と報告されました」と。えっと思いました。困ったなと。なぜ困ったかというと、翌日の十月一日は金沢市内のお寺さんの報恩講だったんですね、一時半から。これに間に合わなければいけないという思いが先に立ちました。だから浅田さんではないですけど、それを聞いてからずっと頭の中で台風の進路が変わってくれないかなと、このことばかりが気になりました。三〇日は山陽新幹線は全て運休ということで帰ることができませんので、そのお寺に泊めていただきました。

夜、泊めていただきながら何をしたかというと、スマートフォンを開いてですね、山陽新幹線の運行情報や北陸本線の運行情報、そういうことを気にしながら寝ていた。そして朝ですね、目が覚めて一番先に何をしたかというと、またスマートフォンですよね。スマートフォンを手にとって、山陽新幹線は何時から動き出すか調べました。そしたら新幹線はね、始発から動くんですね。ところが、新大阪まで行っても、その後の北陸本線が1時台まで動かないと出ているんですね。困ったなぁと。そしてお寺さんに電話かけて、「今まだ広島におります。なんとか新幹線は動くんですけど、北陸本線のサンダーバードの運行状況がまだわからないので、もしかしたら報恩講に遅れていくかもしれませんのでその時はよろしくお願いします」とお伝えしました。

そういう風にもう我が身のことしか見えないんですね。自分のことしか目に入らない。一晩中、雨と風の中で、台風の進路にあたった方々が一夜をどう過ごしたかということには目も行かず、耳も行かず、ただ我が身のことだけを祈る。まさに祈るんですね。自分のことだけが最重要課題、我が身だけのことを考えてしまう。親鸞聖人の念仏を申して下さい、そして生きる喜びを念仏から見出して下さいと言われているお言葉を知っていながら、本当に我が身のことしか見えないんだな。

また蓮如上人はですね、五帖目第九通の『御文（おふみ）』の冒頭でこう言われます。

当流の安心の一義といふは、南無阿弥陀仏の六字のこころなり

こういう風にしっかりと『御文』にも書かれていて、普段からその『御文』を拝読しているんですけど、もうお念仏であるとか、お念仏の謂れは全て飛んでしまって、我が身のことだけなんです。我が身が一番。お念仏をいただいておりながら、その根底に何が潜んでいるかというと、自分が可愛いという心が常にあるんだなぁということを改めて思い知らされました。

だからこの浅田さんの言葉に痛い所を突かれたわけです。私達もご縁があって、こうやってお念仏を申すということを生活の中で繰り返している。また報恩講というかたちでこの本堂に身を運んで来て、親鸞聖人の遺徳を偲び、そのお念仏と出遇った喜びを味わっているわけですけど、一方で自分に何か起こると念仏よりも我が身中心、自己中心的なものがすかさず出てくる。こういう在り様を浅田正作さんが、「台風の進路が変わってくれればいい。こんな者が祈る世の中の安穏とは何か」と。こんな者が祈る、祈るとは南無阿弥陀仏を申すと言ってもいいでしょう。南無阿弥陀仏を申す者が祈る世の中の安穏とは何か。個人のことしか考えない者が世の中の安穏と言ってもそれは何を意味するのか。

本当の私の姿

私達の生活の中にあっても同じようなことがやはりあると思います。つい先達てもですね、ちょっとした言葉の違いで夫婦喧嘩を致しました。その夫婦喧嘩をしている時にですね、長女と長男の子どもたちが、すうっと私達二人の前から姿を消しました。横にいると何かとばっちりがくるのではないかと、それを察してか、すうっと姿を消したんですね。そして妻と口喧嘩を続けていたんですけど、その折にですね、一旦姿を消した長女がですね、私のところへ来て耳元でこう、囁いてきました。「お父さんは自分の怒った顔を見たことあるんですか？」と、こう耳元で囁いてまた移動して行きました。その言葉を聞いた時、ハッとしました。

朝、洗面する時は自分の顔が鏡に映ります。ところが、夫婦で喧嘩をした時、私の目に映るのは、妻の不機嫌な顔や怒っている顔です。その怒っている顔を見るから、余計に私もだんだん怒って来る。この年齢まで自分の不機嫌な顔や、怒った顔は一度も見たことがなかった。これ、皆さんどうですか。朝の洗面する時の顔はよく見る。ところが喧嘩した時の恐ろしい顔というのは、未だかつて一遍も見たことがない。それを長女から指摘された時もまたハッとしました。もしも長女がそのことを耳元で言ってくれなければ、そのことにも気づかないんです。相手の怒った顔はよく見えるんです。ところが自分がどういう顔をして大切な妻に向かって喧嘩をしているのか、その顔は見たこともない。ハッと致しました。

私達は自分のことは自分が一番知っていますよ、こう言いつつも、本当に何を知っているのかなと言うことですよね。そして、その時にですね、ふと頭に蘇った言葉が、こういう言葉でした。これは東本願寺の参拝接待所から御影堂（ごえいどう）に移る高廊下にある法語の言葉です。「他者を鏡として自分が映し出されてくる」この言葉がふっと頭をよぎりました。長女の耳元で囁いた言葉、本当にそのことを言ってもらわなければ自分というものが見えないのです。相手の怒った顔はよく見えるけれど、自分の怒っている顔など想像もしたこともないし、見たこともない。やっぱりそのことを指摘してくれる痛い言葉や、痛い所を突かれることによっ

て、ハッとさせられる。その時、一番根底にあるのは何かというと、自分が可愛いという心ではないでしょうか。世の中のことを色々心配しているけれども、本当の心配は何かというと、我が身ということではないでしょうか。私や私の家族のことが一番の心配事になっている。何かそういう在り様をですね、先達ての口喧嘩の折もそうですが、他者という存在を通して自分というものが教えられていくんだなと気づかされました。

そうすると、この報恩講ということも、確かに親鸞聖人の遺徳を偲ぶということもあると同時に、人と出会い、その人が語る言葉と出会って、この一年間をどのように生きてきたのか、その自分の生き方、または在り様を問い直すのが報恩講という場であり、空間と時間ではないでしょうか。人に出会い、その人が語る言葉を通して、自分の一年間の生き方を、そして在り様を問い正していける。そこに愚かさや恥ずかしさ、至らなさ、色んなものが他者の声を通して聞こえてくる。そこにもう一度お念仏というものをいただき直していく、そのことが大事なことではないでしょうか。

都合の念仏

私達は、お念仏を申す生活をしているんですけれど、その生活の中にあっても、いつの間にかお念仏というものを自分の都合の様に使ってしまうということもあります。時には感謝のお念仏という言葉を使ってみたりする。ところが自分や自分の家族が自分ではどうにもできない出来事に出会った時、私達は家にあるお内仏の前に座ったり、神棚の前で祈るということを致します。自分以外のものに頼るということをします。その祈ったことが成就した時は何も言いません。ところが自分の思ったことが叶わなかった時、私達はどう言うでしょうか。「神や仏があるものか」と、こういう風に言ってしまいます。

祈ることは問題ではないんですよ。問題はその後の「神や仏があるものか」です。これだけお内仏のご本尊の前に座って手を合わせたのに、神棚の前で柏手（かしわで）を打ったのに、なぜ私のことを聞いてくれなかったのかと。ここに気づかなければ、自分という姿が見えないはずです。やはりそういう姿を教えてくれる痛い言葉や、私の痛い所を突く人、言葉に出会うことが非常に大事なことではないでしょうか。まさにこの浅田さんの言葉は本当に大事なことを忘れていた私に改めて自分の在り様を教えてくれましたね。自分の都合、思いを中心とした見方しか出来ず、その中にあって台風２４号では四名の方が命を失い、一七〇数名の方が怪我されているにもかかわらず、そういう方の思いや家族には全く目が行かない。ただ我が身が十月一日に無事金沢に着けるようにと祈る心。

無事に金沢に着いてですね、十月二日にお預かりしているご門徒さんのお宅にお参りに行った時にですね、そこのおばあちゃんがこんなことを言いました。「お寺さん、この間の続いた台風で屋根瓦とか家の方は大丈夫でしたか？」と。こう聞かれたので、「家の方も本堂も大丈夫でした。おばあちゃんのところはどうでしたか？」と答えました。するとおばあちゃんは「うちも風は当たったけれど、なんも害なかったわいね」とこう言われた後に、「松任という所は本当にいい所です。風は吹くけれど水が付くことないし、地震も無いし、これは白山のお陰ですかね」そしてその後に「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」とこう申されました。この気持ちも分かるんですよ。しかし、もしも私達が住んでいる所に何か起こった時、果たしてそこに「なんまんだぶつ」というものが出るでしょうか。

そうすると私達も親鸞聖人や蓮如上人のお言葉は知っていてもその願いが本当に自分の生き様になっているのかどうか。やはりそこで改めて自分中心の在り方をしていたんだなということを教えてくれる人に出会う。言葉に出会う。そこにもう一度自分の在り様が点検、吟味されていくような、非常に大事な意味を持ってくるのではないでしょうか。

作家の沢木耕太郎（さわきこうたろう）という方がこんなことを言われました。これはエッセイ集の中で語りかけられているんですけど、そのエッセイを作品として完成させるために観光地である箱根へ取材に行った。そして一日箱根という所で色んな人に出会い、風景に出会い、食べ物に出会い、そして取材をしてエッセイを作っていく。その一日の一番最後に訪れたのが箱根神社。その箱根神社で何気なく境内を歩いていた時に、外国人の方や日本人の方々が絵馬を購入して、そしてそれぞれの文字を刻んでいるというところに出会った。そして何気なくその奉納されている絵馬にはどういうことが書かれているのかなと思って、その奉納されている絵馬のところへ行ってぱらぱらと何枚か絵馬を見ていた。その時に、ハッとしたと言うんですね。それは日本人が絵馬の裏に書く言葉と、外国の方が絵馬の裏に書く言葉の違い。ここに、ハッとしたと言うんです。

日本人の多くがどういうことを絵馬の後ろに言葉として刻んだかというと、沢木耕太郎さんはこう言いました。合格祈願、就職祈願、恋愛成就、家内安全、これがほとんどの日本人が絵馬の後ろに書く言葉です。ところが外国人の方の絵馬、カタカナやローマ字で書いているその言葉には、世界中の平和、テロ、戦争がこの世界から消えますように。津波に負けるなと、こういう言葉が外国人の絵馬の言葉だった。

外国の方と、日本人である私達、なぜ絵馬にはこういう言葉が対照的になってしまうのか。日本人は私は無宗教ですと主張される方が多いです。一方、外国の方のほとんどが、自分の信じる宗教を持っている。でもその宗教を超えて外国の旅行者の方は世界中が平和になる様に祈る。テロ、戦争がこの世界から消えるようにと。津波に負けるなと。一方日本人は、我が身のことだけですよね。大学合格祈願、就職が出来ますように。恋愛成就、家内安全・・・なぜ日本人は内向的になってしまったのか。内向的、内向きです。一方、外国の方は視野が広い。絵馬の裏の文字一つ一つをとってみても何か私達日本人は内向的に変わっていった。つまり自分さえ良ければいいと自分を中心としての物の見方をするようになった。一方、外国の方は視野が広い。その視野の広さこそがまさに親鸞聖人の言う「世のなか安穏なれ」という言葉に当てはまるのではないでしょうか。

私達も確かにお念仏を申しているんですけど、蓮如上人が

親のため、また、何のため、なんどとて、念仏をつかうなり

『蓮如上人御一代記文書』

と語られるように、いつの間にか私達も「念仏をつかう」姿の中で念仏を申しているのではないでしょうか。そうすると、親鸞聖人や蓮如上人が言われた念仏を申せということと、現代の私達の念仏を申すということが非常に乖離（かいり）したものになってきているのではないでしょうか。自分の都合や、思いを通す念仏にいつの間にかなってしまっているのではないでしょうか。

「世のなか安穏なれ」といわれるような視野の広い、一人一人の人間の尊さや、会ったこともないけれど、同じ大地に、同じ国土に生きている人達一人一人を見ていく眼。そこにあるのは、大乗仏教精神ということでないでしょうか。この大乗ということがいつの間にか私達は忘れている事柄になっていたのかな。大乗ということを通していった時、私はこういう風に受け止めています。我が身のことよりも人のことを気遣いするということ。我が身のことは後回しにして、周りの人のことをまず第一に考える。これが大乗ということではないでしょうか。しかし、いつの間にか私達は、我が身のことが大事になってしまう。周りの人達のことは二の次なんです。どこまでも私というものを中心としていった時、そこには親鸞聖人が願われていた浄土の真宗という仏道はなく、いつの間にか親鸞聖人が捨てたはずの聖道門仏教のように、私達の念仏もそうなってきているのではないでしょうか。私達が念仏を申すということがどういうことなのか、そのことをもう一回確認していかなければならな

い、そういう時ではないかなと思います。

我が身が可愛い

私達もこの我が身が可愛いということですね。何をしているのかと申しますと、占相祭祇（せんそうさいし）ということをするわけです。お念仏を申しておりながらですね、何をするかというと、占相祭祇をするわけです。これは我が家でも毎日のように起こっています。特に占は。長女、長男が学校に通学する前に今日のラッキーカラーは何だろうか、そういうものをやっぱりチェックしていきます。日常生活の中で、私達も気にはしてないけれど、このことに身を置いているということはなかったでしょうか。気にはしないけれど、占いをみてもらう。手相、足の相、顔の相、家の相、あるいはお墓の相、色んな形で相を見る。

祭、これは従来の祭りではないそうです。どういう祭りかといいますと、典型的なことを言いますと、京都の祇園祭です。京都の祇園祭はご承知のように京都中に感染病、伝染病が流行った時に、それを鎮める為にされたのが祇園祭です。祟りを鎮める、悪霊を鎮めるということです。そうすると私達の日常の中でも、確かにお念仏を申している日常はありますけれど、しかしどこかでこれを気にする在り様も持っている。念仏一つと言いつつも現実には、何かどうにも出来ない出来事に出会うと、この占相祭祇というものに頼る。

そうすると私達は何を本当の拠り所として生きて来ているんでしょうか。様々なものを大事な拠り所として私達は生きています。家族もそうです。経済もそうです。仕事もいろんなことを大事にしてきた。それぞれが大事なものを拠り所として歩いているわけですけれど、仕事にしてみても経済にしてみても家族にしてみても最後の最後まで当てにならんということです。仕事というのも定年を迎えれば一線から身を引かなければならない。経済といってもその経済できちんと成り立っていくかというと、成り立っていかない。家族といつまでも一緒にいたいと思っても、そのお命を終えて行かなければならない。そうすると、確かに目に見えるものを当てにしているけれど、一つ一つ失っていった時、最後に残るのはこの私です。その私が何を本当に拠り所として生きているのか。その拠り所といってみても結局は自分が可愛いというところでしか立てない。自分が可愛いともう自分のことしか目に見えなくなる。そういう私の在り様を指摘してくれる人、言葉、これに出会わないと私達は、本当に自分というものの正体がはっきりしない。この自分の正体とは一体何か。それは自分で見つけることは出来ないんですよ。他者の声を聞き、教えの声を聞いて初めて自分の正体が見えてくる。

だから私もですね、浅田正作さんの言葉を改めて手にとって読んだ時、ハッとしました。「台風の進路が変わってくれればいい、こんな者が祈る世の中の安穏とは何か」。本当に痛い所を突かれたなと。できれば会いたくない言葉でした。会いたくないですよ、自分の隠している所をズバッと言い当ててくれたんですから。会いたくないし、見たくない。

私は何を拠り所として生きていたんだろうか、あるいは念仏を申すといいつつも、どこかで念仏を使う様な在り方をしていたのではないか、浅田さんの言葉や、長女の何気ない言葉にハッとした時、本当に恥ずかしくなりました。恥ずかしさやら、愚かさやら。何か覆い隠されていたものがパッと全部出た時、改めて本当にこれが自分の正体なんだなと。私達はそういう自分と会いたくないんですよ。会わずにいたいわけです。会わずに今の自分を隠したまま、うわべだけの自分で過ごして行きたい。しかしそれを許さないのがお念仏を申せということでないのでしょうか。お念仏を申せという言葉は、南無阿弥陀仏を申せということと同時に、それはお念仏の謂れを聞いて、自分ということを知りなさいということです。

表と裏

江戸時代に、新潟県で生きられた

良寛（りょうかん）という方が、晴れた日に草庵の縁側に座って紅葉している紅葉を見た時に、風もないのに枝から紅葉の葉が一枚チラチラと散って地面に落ちた。その何気ない様子を見て良寛さんはこういう言葉で語りかけられた。

裏を見せ
　表を見せて
　　散るもみじ

私達もこれからの季節、紅葉狩りというかたちで観光地へ行きます。あぁ綺麗だなと写真に撮ったりもします。しかし、紅葉の裏はどうなっているでしょうか。葉脈で汚れて黒々となっています。表面は綺麗に紅葉した赤です。しかし裏は汚れています。綺麗な表の紅葉は、今いる私の姿でないでしょうか。しかし、この私の裏側には何があるでしょうか。人には見せたくない、人には言えないドロドロした汚れたものがある。しかし紅葉は、紅葉した綺麗な部分を見せて地面に落ちてきたわけではなくて、「裏を見せ　表を見せて　散るもみじ」と、ここに良寛さんは自分を見たんでしょう。ただ紅葉が散るのを見たのでなくて、自分を見たわけでしょう。私達も自分を正当化する為に、自分を守る為に綺麗な自分だけを見せようとしている。しかし裏側には汚れたものを抱えている。それを紅葉のように見せつつ散ることが出来たら、私達も楽なはずです。人を気にすることなく、自分らしく自分を見せるということが現代という時代は一番難しいわけでしょう。自分のそういう汚れた所を知ってあの人はどう思うだろうかとついつい我が身のことよりも相手のことを考えてしまう。そうすると自分というものを見せなくなる。見せなくなった場合はどうするか、綺麗なものを、着飾ったものを自分として見せ、どんどんどんどん自分以外のもので覆い隠す自分で、その姿を着飾っていくのではないでしょうか。着飾れば着飾るほど重いですよ。でも脱げなくなるんですよ。それを脱ぐ、一つ一つ外せ、それがお念仏の声でもあるんでしょう。着飾ったものは重いだろう。それを一つ一つ外していきなさい。何も恥ずかしいことはないよ。恥ずかしがらずにそのことに初めて自分の正体が教えられるんです。それが生きる喜びなんでしょう。その生きる喜びをお念仏の教えに見いだされた方が私達にとって宗祖と仰ぐ親鸞聖人。その親鸞聖人の生き様、在り様がまさにこういう姿だよと。だから親鸞聖人はご自分のことを愚と抑えられたんでしょう。

愚かというだけでなくて、もう一つの意味は、ただ人やと言うことです。ただ人なんだよと。色んなものを抱えていますよと。そして、ご和讃の中で私の中には蛇（へび）や蠍（さそり）がいるんですよとおっしゃる。念仏に帰してお念仏に生きている親鸞聖人ですけども、実は私の中にも蛇蠍（じゃかつ）が今もいるんですと。そういうことをきちんと抑えてくれる。でも私達はそれを隠したいんです。隠したいんですよ。でも隠すこと無く、それをさらけ出すということは、痛い言葉に出会わないと、痛い所を突かれないと、本当に気づかないんです。気づいた時、初めてそこに自分の在り様が改めて見えてくる。そうするとそこにもう一度聞き始めるということが繰り返し繰り返し出てくるんでないでしょうか。

聴く人、親鸞

九月の上旬でしたけれど真宗本廟のですね、御影堂（ごえいどう）で一時間も御真影（ごしんねい）の前で座っている女性の姿をみました。どういうことを抱えてこの御真影の前で身を置いて、そして一時間座っているのかな。どういうお話を親鸞聖人とされているのかな。私は今まで親鸞聖人という方は、語る人

祖師前の親鸞聖人

※「きこまいけ」毎月 28 日・午後２時～　みんなで「正信偈」のおけいこをしています。お気軽にどうぞ。

だと思っていたんです。色んなお話をする人、語る人が親鸞聖人だという風に思っていた部分がありました。ところがその女性の姿を見た時に、親鸞聖人というのは語る人ではなくて、聴く人親鸞ではなかったのかなと気づかされました。

それぞれがいろんなものを抱えて、そしてだれにも語ることが出来ないものを抱えながら、縁あって京都まで来て、御真影の前に座り自分の思いを語られている。それをずっと聴いている人、親鸞聖人。そしてその姿を見た時に、私が勝手に思ったんですけど、「今私はあなたに的確な言葉を語りかけることは出来ません。しかし、あなたがここへ来るまでどんな思いで、どんなものを抱え、どんなことを考えながらここへ来たのかその歩みだけはしっかり見ています。出来れば一緒に念仏を申しませんか」。こう語りかけられているのが親鸞聖人ではなかったのかな。何か一方的に言葉を語って、こうしなさいと言うのではなくて、その方一人一人が抱えていることをずっと聴き続け、聴き続け、その姿を焼き付けて、そしてそこから「共に念仏を申しませんか。そして念仏を申すことを通して、一緒にその謂れを聞いていきませんか」と語りかけてくださっている。そういうことをずっとされたのが、親鸞聖人ではなかろうか。自身を語る人ではなくて、聴く人、親鸞。

自分の中にある平生は蓋をして覆い被している自分を突いてくれる、ただ突くのではなくて痛い所を突いてくれる、それがお念仏をいただいて歩いている人の姿ではなかろうか。だから痛い所を突かれないと私達は目が覚めないんですよ。痛い言葉で痛い所をズキッと言ってくれないと、目が覚めないのです。だから念仏を申すということは、目が覚めるんですよ。何に目が覚めるか？自分に目が覚めるんですよ。自分自身の正体に初めて自分が気づかされる。

確かに世の中の色んな出来事を心配しているけれども、正直なところ、我が身が一番可愛いというところに立っているんだ。可哀想だという気持ちと同時に、私や私の家族でなくてよかった。こういう私をズキッと突いてくれる。そこに初めて自分が狭い世界にしか目を向けていなかった。また念仏を申すことを利用していたんだ。「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」というこのお言葉が私達にどういう世界を生きろと言っているのか、そういうことを台風２４号の影響を受けたことを通して改めて私自身気づかされ、本当に恥ずかしくなりました。あぁ、自分も念仏を申していてもいつの間にか狭い世界の中に閉じこもっていたんだなと。

根底にあるのは、我が身が一番なんです。我が身が一番可愛いというのが抜けきれないのが私なんやな。しかし、そのことを親鸞聖人は怒るわけではないんです。ようやくそこに気づきましたか、気づいたら今度は歩み出せるはずですよ。他者を気にし、世の中を気にし、そして歩んで行けること、そこから一歩踏み出すことができますよ。そういうお念仏の歩みを私達に教えてくれているのかなと。そういうご縁がですね、実はこの報恩講という尊いご縁の場であるかと思っております。

今日はご縁をいただきましてどうも失礼致しました。ありがとうございました。

《編集後記》

◇本文は平成三十年十月十七日、浄光寺「報恩講」大逮夜の法話録であります。洵（まこと）に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

＊行事のご案内＊

「追弔会」
日・令和二年八月十三日（木）
時・午前十時～
法話・細川公英師（順教寺住職）

「きこまいけ」（浄光寺聞法会）
毎月二十八日・午後二時

新型コロナウイルス感染拡大防止のために中断しておりました「きこまいけ」ですが、予防対策を徹底した上で七月より再開させていただくことに致しました。

こんな時だからこそ親鸞聖人のみ教えに私たちの在り様を訪ねてまいりたいと思います。皆様のご参加をお待ちしております。はじめての方も大歓迎です。お気軽にお越しくださいませ。